

エルサルバドル共和国における先スペイン期遺跡出土土器の 学術資料化プロジェクト

市川 彰

考古学専門 博士前期課程2年

はじめに

エルサルバドル共和国（以下、エ国）の考古学は、慢性的な資金・人材不足から、十分な調査研究を実施可能な環境が整備されているというわけではない。近年のインフラ整備などに伴う調査数増加と人材不足の反比例は膨大な未整理遺物を増大させる弊害を生んでおり、貴重な学術的価値を有する考古学的遺構・遺物が資料化されず、十分に活用されていない。そのため、隣国グアテマラ共和国、ホンジュラス共和国と比較しても、調査研究が十分に実施されているとはいえない状況にあった。

1. プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、エ国における既発掘・未整理の出土土器の資料化・分析を行い、様々な考古学的研究のための基盤構築・整備にある。

本稿では、資料化・分析を行った土器資料を用いて先古典期後期および終末期（前400～後250年）から古典期前期（後250～600年）へのメソアメリカ南東部の社会変化とその背景について若干の考察をしたい。

2. 調査方法および対象

主にエ国チャルチュアパ市カサ・ブランカ遺跡公園、エ国文化庁考古課およびエ国国立人類学博物館所蔵の先古典期から古典期に属すると考えられる未整理の土器を中心に、整理・資料化を行った。

出土土器は洗浄、注記、接合、修復、実測、写真撮影などを経て分析・研究用の資料として保管した。さらに、資料化した土器資料の型式学的特徴と、建造物や埋葬遺構など考古学的遺構との関係から、土器の通時的な型式変化を検討した。

なお、周辺地域の最新の研究動向の把握、資料収集を目的として7月13～17日に第23回グアテマラ考古

学シンポジウム（グアテマラ・シティ）、7月19～24日に第53回アメリカニスタ国際会議（メキシコ・シティ）にて本プロジェクトの成果の一部を発表した。

3. メソアメリカ南東部の地理的環境

新大陸の中央に位置するメソアメリカでは、マヤ文明、アステカ文明などが栄えた（図1）。メソアメリカ南東部は、文化的にはマヤ南部地域とニカラグア・コスタリカ地域に分けられる。マヤ南部地域にはカミナルフユ遺跡やチャルチュアパ遺跡などがある。当該地域では、先古典期中・後期（前1000～後250年）には神殿ピラミッド群や石碑祭壇複合、文字、暦など古典期マヤ中部地域に特徴的な文化的要素がすでに出現していた。こうした背景からマヤ南部地域は、マヤ中部地域古典期社会の形成・発展に影響を与えた、と言われている（Willey et al. 1965）。

一方、ニカラグア・コスタリカ地域は、マヤ地域に包含されず、異なる先スペイン期社会・文化が存在していたとされている。しかし、他のメソアメリカ地域と共通する文化的特徴（例：階段状建造物、フラスコ状ピットなど）を有しており、ニカラグア・コスタリカ地域を、本稿ではメソアメリカ南東部と位置づけている。

上述したマヤ地域とニカラグア・コスタリカ地域は、互いに隣接し、両地域の社会文化的関係について



図1 メソアメリカ地図

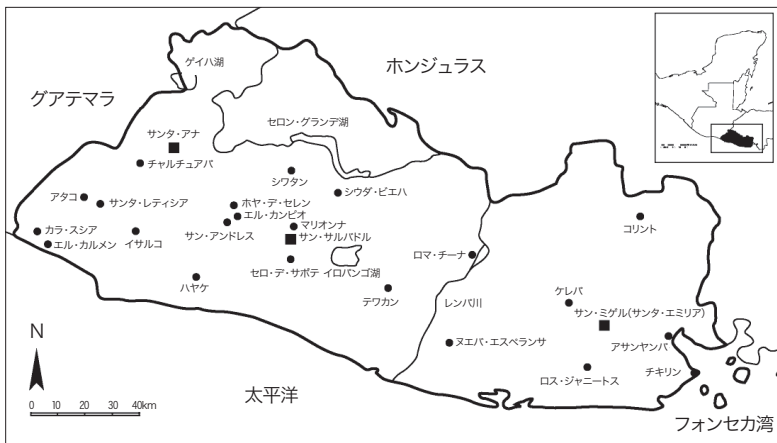


図2 エルサルバドル共和国主要遺跡の位置図

重要視されてきた (Lange and Stone et al. 1984)。しかし、長年にわたりその関係性については、メソアメリカ考古学史では十分に検討されてこなかった。エ国を東西に二分するレンパ川は、その両地域の境界線とも言われており、エ国周辺は、両文化圏の比較研究を行う上で重要な地域と位置づけられる (図 2)。

4. 資料化した土器

本プロジェクトで資料化した土器は、計370点である。内訳は、チャルチュアパ遺跡群ラ・クチージャ地区144点、同遺跡群タスマル地区134点、ヌエバ・エスペランサ遺跡45点、サンタ・エミリア遺跡4点、マリオンナ遺跡2点、プエルト・パラダ遺跡41点である（図2）。

チャルチュアパ遺跡群ラ・クチージャ地区

ラ・クチージャ地区は、チャルチュアパ遺跡群カサ・ブランカ遺跡公園南側の平坦地に位置し、先古典期後期から後古典期の遺構・遺物が見られる。45基の埋葬遺構の他、配石遺構や炉址などが検出された (Ichikawa 2008)。原位置の特定できる土器を中心に144点を実測・写真撮影し、資料化を行った。

先古典期後期または終末期に属する土器は浅鉢、壺、碗、器台、皿、円筒などがあり、器形が多様である。装飾についてもウスルトン・ネガティヴ文様、赤彩、乳房型脚、動物・人物形象など、多様である。特に、オレンジ色化粧土に、ウスルトン・ネガティヴ文や赤彩を施した土器が全体の約5割を占め、この地域の特徴的な土器と言える。当該地域は、先古典期後期にグアテマラ中央高地カミナルフユ遺跡に代表されるミラフローレス・プロビデンシア土器文化圏に包含さ

れる (Demarest 1986)。とはいえ、ラ・クチージャ地区の埋葬遺構や配石遺構には、当該地域に最も特徴的な土器を副葬または配置するといった、独自性を保持していた傾向がうかがえる。

口縁部に赤帯を持つオレンジ色土器や化粧土削り文など古典期前期の特徴を有する土器が見られ、同遺跡の資料は、先古典期後期から古典期前期への土器編年を構築する上で貴重な資料となろう。

多彩色浅鉢形土器など、古典期後期または後古典期に属すると考えられる土器も、少量ながら埋葬に伴って出土している。

チャルチュアパ遺跡群タスマル地区

タスマル地区は、チャルチュアパ遺跡群南端に位置し古典期を中心に発展した遺跡である。

数百点以上に及ぶタスマル遺跡出土土器の多くは、スタンレー・ボッグスらによる1940年代以降の発掘調査において出土している。エ国国立人類学博物館に所蔵されている出土土器のうち、出土状況が判明するものを中心として134点を写真撮影し、資料化を行った。

資料化した土器には、形式的に先古典期に属する土器もあるが出土地が不明である。そのため、資料化を行ったのは、古典期前期および古典期後期の土器群が中心である。

古典期前期の土器は、埋葬 8, 13, 14, 18 から出土している。特徴的な型式としてクリーム地高台付浅鉢形土器（写真 1）がある。口縁部に赤帯を持ち、内外面にウスルタン・ネガティブ文様、内面には、赤彩または赤・黒彩による幾何学文、あるいは動物をモチーフにした彩色が施されている。

ウスルタン・ネガティヴ文の文様は、先古典期と比



写真1 クリーム地高台付浅鉢形土器（埋葬14）



写真2 コパドール多彩色土器（埋葬2）

較し、簡素化され、様式化している。また、彩色しただけの偽ウスルタン様式も出現する。内面には、赤・黒彩の幾何学文が施されるが、3色以上の多彩色土器はこの時期には見られない。

古典期後期の土器は、埋葬1, 2, 3, 4, 7, 11から出土している。特徴的な土器としては、多彩色浅鉢形土器がある。内外面の彩色は、幾何学文、様式化された人物、文字と思われる図像など多様になる。なお、当該地域の先行研究では、コパドール多彩色土器（写真2）などがこの時期の指標とされるが、タスマル地区においても同様の特徴を有する土器が出土している。先古典期や古典期前期の土器群と比較し、土器型式が簡素化・定型化するが、荘厳な衣裳をまとった支配層や、祭祀性の強い図像を描いた多彩文装飾技術が発達するようである。

古典期前期・後期に共通する土器として、茶褐色粗製浅鉢形土器が存在する（134点中22点）。これらが長期的に他の精製土器とともに墓に副葬されることは興味深く、その機能・用途を考える上で重要である。カミナルフユ遺跡などでも同様の土器が見られる（Kidder et al. 1946: 207）。

ヌエバ・エスペランサ遺跡

ヌエバ・エスペランサ遺跡は、エ国東部太平洋沿岸に位置し、イロパング白色火山灰層直下から土器19点が埋葬に伴い出土した。また、廃棄場と想定される土坑からは、大量の粗製土器片が出土した。これらの土器は、大きく3類に分類することが可能である。

第1類は、4脚付浅鉢形土器で、クリーム地にオレンジ色の化粧土が施されている。口縁内部に赤帯を持ち、内面に太めのウスルタン・ネガティブ文を有し、「X」字文や波状文など、幾何学的に文様が施されている土器がある。4脚は、鳥表現と考えられる動物形



写真3 ヌエバ・エスペランサ遺跡出土第1類土器（副葬品13）

象脚が主体を成す（写真3）。

第2類は、形が第1類と類似するが、口縁内部に赤帯を持たない。内面のウスルタン・ネガティブ文には、「X」字文がなく、2～5本程度の平行斜線または波状文で構成される。4脚は、動物形象脚のほかに、乳房形脚がある。口縁直径は第1類（平均23.21cm）と比較し、全体的に小型（平均21.74cm）になる。

第3類は、同遺跡出土の大半を占める粗製土器で、全て破片出土である。今後、検証の必要性はあるが、出土状況、強い二次焼成痕、内面の磨き調整、推定器形（尖底・深鉢）から沿岸地域における生産活動に関連する遺物、すなわち製塩土器の可能性を考えている。

第1類は、口縁部の赤帯、ウスルタン・ネガティブ文の文様から古典期前期と考えられる。第2類は、乳房型脚やウスルタン・ネガティブ文の文様、器形から先古典期終末期と想定している。このことから少なくともイロパング火山噴火以前¹⁾には、古典期に特徴的な要素が出現していたことがわかる。

出土土器には、古典期前期以降の遺物が見られない。発掘調査時の層位学的な観察結果からも、火山噴火以降、洪水などの水害も重なり、同地域には、人々が再定住し、生活を営むことがなかった蓋然性が高い。

プエルト・パラダ遺跡

プエルト・パラダ遺跡は、ヌエバ・エスペランサ遺跡から東へ30kmに位置する沿岸部の遺跡である。土器型式は、ヌエバ・エスペランサ遺跡出土土器と類似するが、胎土や文様が明らかに異なる。特に、ウスルタン文白色地土器が多く、「X」字文が見られる。多彩色土器も見られ、ヌエバ・エスペランサ遺跡とは異なり、同地域では少なくとも先古典期後期から古典期後期ぐらいまで居住が継続されていた、と考えられる。

サンタ・エミリア遺跡

サンタ・エミリア遺跡は、エ国東部主要都市サン・ミゲル市郊外に位置する。東部を代表するケレパ遺跡が近隣にある。2基の埋葬に伴い土器4点が出土した。

全てウスルタン・ネガティブ文が施され、摩滅したボタン型4脚を持つ。ケレパ遺跡に特徴的な凹型底部を持つ鉢形土器が出土する。ウスルタン文様と型式からは、先古典期後期に相当するものである。

マリオンナ遺跡

マリオンナ遺跡は、首都サンサルバドルから北東へ約5kmに位置する。イロパンゴ白色火山灰層下より、大量の土器片を含むフラスコ状ピットが検出された。保存状態の悪い人骨も出土している。

器形が復元可能な土器には、大型の茶褐色平底浅鉢形土器がある。外面には、粗雑な刺突文や刻線文が施されている。また、器壁が厚い壺形土器などがある。

これらの土器は、イロパンゴ白色火山灰層下であること、土器型式から、少なくとも先古典期後期に属するのが妥当である。

5. メソアメリカ南東部における先古典期から古典期への社会変化

ここでは、特に現在のエ国周辺地域の先古典期から古典期への社会変化とその背景について、資料化を行った土器群とこれまでの発掘調査成果から、若干の考

察を行う。

先古典期後期は、土器の文様や器形が多様であり、チャルチュアパ遺跡群に代表される当該地域の土器文化が最も華やかな時期であった、と考えられる。特に、オレンジ地ウスルタン文土器は、その器形や装飾の多様さ、出土量の多さから、この地域周辺が生産あるいは交易や流通の中心地であった、と考えられる。そして、ここからメソアメリカ各地へ広がっていった可能性もある。

ラ・クチージャ地区の埋葬に伴う土器群の約5割はオレンジ地ウスルタン・ネガティブ文土器であり、先古典期後期を代表するカミナルフユ遺跡などで特徴的な茶褐色細刻線土器が伴わない。これは、遠隔地交易や情報の交換が行われても墓制、特に、副葬品には在地的要素が反映されることを示唆する。

一方、古典期に入るとテオティワカン式土器やカミナルフユ遺跡の埋葬で見られる茶褐色粗製浅鉢形土器が副葬される他、高台付浅鉢形土器などが出現する。伝統的なウスルタン文は、簡素化され、さらに化粧土削り文へと変化の過程が想定される。副葬土器の変化に加え、この時期は、建造物の中心軸・方位や建築材・建築様式など、その社会を象徴する各要素が変化している。この時期には、先古典期には見られない、極めて豊富なヒスイ製品などの副葬品を伴う埋葬行爲が、神殿改築に伴い行われていたことも明らかとなっている。

これらの変化からは、次のような現在のエ国一帯の先スペイン期の社会変化の過程が考えられるのではないだろうか。

先古典期社会は、周辺地域との交易、情報の交換などを通じて、宗教観念や技術体系など互いに共通点を持ちながらも、自律的に発展していった。一方、古典期社会は、先古典期の伝統的要素を継続しつつも、外来的要素を地域間相互作用の中で積極的に受容し、社会の諸要素を変化させていった。新しい建築様式や豊富な副葬品を含む葬送儀礼に、その変化が反映された。とりわけ厚葬化は、その社会内に特別な支配層の存在をうかがわせる。

このようなエ国周辺の変化は、近年の発掘調査からイロパンゴ火山噴火以前に起きていたことが、考古学的に以前より明確になっている。先行研究で述べられてきたような突発的な自然災害(Sharer 1974他)を要因とした社会変化には懐疑的な見解が示されており、近年の調査成果は、それらを裏付ける結果と言える。土器型式と社会の諸要素の変化が連動していることに

については、厚葬化に反映されるように、特別な支配層の出現と階層化の発達という現象を背景として、漸次的に社会内部で起こった、と考えたい。

紙面の関係上比較資料の提示は行えないが、社会変化と他地域との関連性について、現在のエ国一帯とニカラグア・コスタリカ地域の双方には、土器型式や埋葬形態という観点からは強い関連性がうかがえない。

6. 今後の課題と展望

本プロジェクトの目的は、冒頭に述べたとおり、既発掘・未整理資料の資料化・分析を行い、様々な研究のための基盤を構築・整備することである。本プロジェクトによって、総数370点の土器資料が、今後の研究資源として活用可能なものになった。しかし、エ国の様々な機関に所蔵されている資料を、全て図化・資料化できたわけではない。また、各遺跡の資料においても、主に遺構に伴う遺物を中心としており、今後それ以外の層位学的発掘に基づいた遺物包含層出土の土器についても着目し、補遺を行う必要がある。

今回、これまで研究事例が少なかったエ国中央部や東部地域の遺物も資料化できた意義は大きい。以後、これらの資料が、エ国またはメソアメリカ南東部の土器編年研究や地域間交易、先スペイン期の社会変化などの諸問題の解明の一助となれば幸いである。

今後は、今回あまり着手することのできなかった各地の古典期遺物についても資料化を行い、より大きな時空間的枠組みの中で、当該地域の歴史及び人類史の再構成のための基本資料を構築することを目指し、さらなる資料化の作業を進めていきたい。

おわりに

本プロジェクトのような地道な実践活動の成果は、一朝一夕で価値が見出されるのではなく、今後も継続的に行うことで、研究に貢献することができる。日本考古学が世界に誇る精緻な土器編年研究を模範として、エ国においてその一步を踏み出せたことは、本プロジェクトの大きな成果と言える。また、本プロジェクト実施にあたり、様々なエ国研究者、学生との意見交換、知識・技術の移転を行えたことは、今後の研究基盤構築の一助となるであろう。

謝辞

本プロジェクト実行にあたりまして、以下の方々および調査機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます（個人・機関とも五十音順、敬称略）。池田瑞穂、伊藤伸幸、ウーゴ・チャベス、オスカル・カマチョ、工藤匡史、グレゴリオ・ベジヨ・スワソ、柴田潮音、フリオ・アルバラード、ホルヘ・ルビオ、ミチエル・トレド、村野正景、森田航。エルサルバドル共和国文化庁考古課、エルサルバドル国立人類学博物館、エルサルバドル技術大学人類学教室。

また、指導教官である山本直人先生、同研究室講師梶原義実先生には常日頃ご指導を頂き、深く感謝申し上げます。最後に、本プロジェクトに関して様々な面で多大なるご支援・ご指導を頂いた名古屋大学教育研究推進室柴田淑枝氏にも末筆ながら感謝申し上げます。

注

1) 主にペyson・シーツらの AD260±114 yr BP という放射性炭素年代 (Sheets 1983) とロバート・ダル (Dull et al. 2001) らの AD429 (408–536) 年 (年代幅は2σ) が使用されている。絶対年代は現在議論中であり、各研究者により使用年代が異なる。

参考文献

- Braswell, Geoffrey E. (ed.) 2003 *The Maya and Teotihuacan—Reinterpreting Early Classic Interaction—*. University of Texas Press, Austin.
- Demarest, Aurtur A. 1986 *The Prehistory of Santa Leticia*. Middle American Research Institute Publication, No. 52. New Orleans. Tulane University.
- Dull, Robert A., John R. Southon and Payson D. Sheets 2001 Volcanism, ecology and culture: A reassessment of the Volcán Ilopango TBJ eruption in the southern Maya realm. In *Latin American Antiquity* 12, pp. 25–44.
- Ichikawa, Akira 2008 Rescate arqueológico en el sitio “La Cuchilla” al sur del área de Casa Blanca, Chalchuapa, El Salvador. En *XXI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2007* (editado por J. P. Laporte, B. Arroyo y H. Mejía), pp. 1031–1044. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- Kidder, Alfred J., Jesse D. Jennings and Edwin M. Shook 1946 *Excavations at Kaminaljuyu, Guatemala*. The Pennsylvania State University Press.
- Lange, Frederick W. and Doris Z. Stone (ed.) 1984 *The Archaeology of Lower Central America*. A School of American Research Book. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- Sharer, Robert J. 1974 The Prehistory of the Southeastern Maya Periphery. In *Current Anthropology Vol. 15, No. 2*, pp. 165–187.
- Sheets, Payson 1983 Introducción. In *Archaeology and Volcanism in Central America The Zapotitán Valley of El Salvador*, pp. 1–13. University of Texas Press, Austin.
- Wiley, Gordon R. (ed.) 1965 *Archaeology of Southern Mesoamerica Part. 1. Handbook of Middle American Indians vol. 2*. University Texas Press, Austin.